

イウカさんの OLÁ, HIKONE!



(olá[オラ]=ポルトガル語で「こんにちは」)

第8回 首都ブラジリア

彦根の皆さん、こんにちは！

3月になり少しずつ暖かくなってきました。今からお花見の季節がとても楽しみです。

寒い冬の間にも、皆さんからいろいろ教えてもらって、いい思い出がたくさん増えました。彦根の冬の楽しさ、美しさはすばらしいですね。彦根に来て、もう少しで1年が経ちます。この1年間で、彦根は私にとって、本当に住みたい、住み続けたいと思えるまちになりました。

さて、今月は卒業式、新しい旅立ちの季節ですね。彦根市の小・中学校には、日本の文化や言葉に完全に慣れていない、外国から来た子どもたちがたくさんいます。また、日本語や日本の文化を学ぶために来日している留学生や、仕事をしながら勉強する研修生などいて、彦根には約1,600人の外国人が生活をしているのです。その人たちには、言葉の壁や教育制度、友達との付き合い方の違いなど、日本についてまだ分からないことがたくさんあるはずで、そんな人たちと交流することは、自分たちと違った文化に出会い、友情の楽しさ・豊かさを感じるすばらしい体験をもたらしてくれるでしょう。偏見や差別など、心の狭い寂しいことがなくなるように協力したら、この彦根、そして世界は、もっとすばらしいところになると思います。

◆私のふるさと

さて、今回は私が育ったブラジルの首都ブラジリアを詳しく紹介したいと思います。

ブラジリアは、ほとんど人の住まない土地に、全く新しく建設された都市で、ユネスコの世界遺産にも指定されています。また、極めて高い生活水準や、住む人の一人当たりの所得が高いことでも有名なまちです。

ブラジリア（市の中心に立つテレビ塔の展望台から）



日本では、首都機能を移転しようとする話があると聞いたことがあります。これと似たような話が、前の世紀（20世紀のことですよ！）に、ブラジルであったのです。ブラジリアが建設される前のブラジルの首都は、海岸沿いの都市リオ・デ・ジャネイロでした。けれども、戦争のときに防御しにくいとか、国の発展のためには内陸部の首都のほうが都合がいいという意見があって、ブラジルのちょうど真ん中にある四角い土地に首都を移し、ゼロから新しい都市を建設しようということになったのです。

◆おばあちゃん、おじいちゃんがない！

その結果、1960年に首都が移りました。来月の21日にブラジリアは42歳の誕生日を迎えます。私は1981年、5歳の時に家族とサン・パウロからブラジリアに引っ越ししました。父親は自分の農場を始めるため、母親はできてまだ間もないブラジリア国立大学で日本語講座を開くためです。サン・パウロでは親戚がいましたが、ブラジリアでは知り合いや親戚もいなかったため、開拓者のような気持ちでいたように覚えています。ブラジリアに引っ越してきた人たちも同じような気持ちを持っていたでしょう。学校では、ブラジリアで生まれた子どもはとて最少なく、10分の1以下でした。ほとんどの子どもたちは、私と同じようにブラジリアに親戚がいませんでした。ブラジリアは、おばあちゃんとおじいちゃんがないまちともいわれていました。新しいまちの歴史が、始まったところだったのです。

ブラジリアは、いろいろな特徴を持ったまちです。まちを空から見ると、大きな十字や飛行機の形に見えること、二つの季節（雨季と乾季）を持ち、乾季対策のための人工の湖パラノア湖があること。さらに、都市計画を大事にする未来的なまちで、公立学校の教育水準も高く、子どもを育てるのにブラジルで一番適したまちといわれていることもその一つかもしれません。

◆論理的で、人工的

さまざまな機能によって区画が分けられていることも大きな特徴です。居住区（マンションや家しかありません）ホテル区、商業区、銀行区、国家機関が立ち並ぶ区域、自治体政府の区域、ショッピング・センター、学校、教会の区域などが、整然と並んでいます。住所の表示も非常に分かりやすく、論理的な考え方をしたら、ブラジリアで道に迷うことはありません。いかにも人工的な都市という感じで、面白いところですよ。

治安もよく、観光地や遊びに行く所がたくさんあります。近くには自然に恵まれた国立公園や、いろいろな大きさや種類の水晶がある町もあります。ブラジルを訪ねる機会があったら、ぜひ遊びに行くことをおすすめします。

（「ポルトガル語・最初の一步」はお休みします。）

チャウ アテ オ メス ケ ベン
Tchau, até o mês que vem!（さよなら、また来月）

（彦根市国際交流員 上甲イウカ）